

「5つの工夫」で 「主体的・対話的で深い学び」 を実現する

～国語・理科・総合的な学習の
カリキュラム・マネジメントを通して～

執筆 北海道函館市立万年橋小学校教諭 藤原友和

はじめに



「主体的・対話的で深い学び」とは、「授業改善の視点」です。つまり、「これこそが」という実体があるのではなく、あくまでもよりよいものを目指すための視点であるという留意が必要でしょう。では、そこではどのような方向性を目指されているのでしょうか。

まず、「主体的な学び」には「見通し」「粘り強さ」「振り返り」が示されています。これは、学びのプロセスを自分で自覚しながら行うこと、いわゆる「学び方を学ぶ」ことが求められていると言えるでしょう。次に「対話的な学び」です。「子ども同士の協働」「教職員との対話」「先哲の考え」など、対話する対象は様々ですが、要するに他者との出会いを通じて、自分の考えを深めたり広げたりするという要素が求められています。最後に「深い学び」です。「総則」には、「知識の関連付けによる深い理解」等、4点が例示されています。どれもが「習得・活用・探究」という従来から大切にされてきた学びの過程が重視されています。そして、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせるという視

点が併せて示されました。

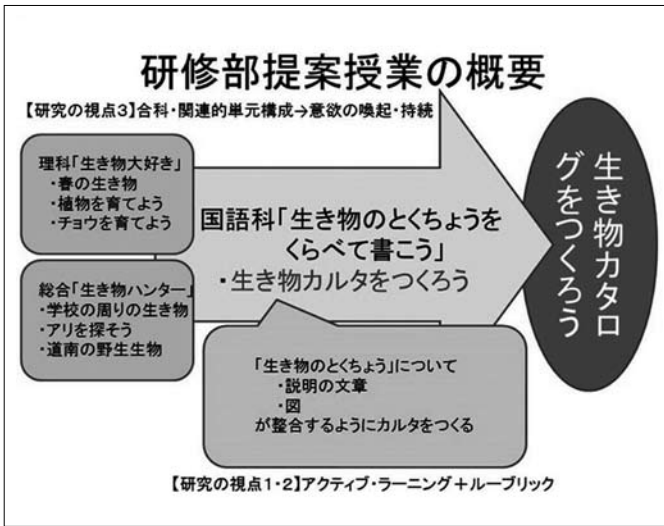
授業の中でこれらを実現すること、授業をこれらの視点でよりよく改善していくことが、これからの授業づくりにおける課題です。

本稿は、平成28年度北海道函館市立昭和小学校第三学年の児童（3学級・88名）を対象に取り組んだ、国語・理科・総合的な学習の時間における教科横断的な指導による実践の記録です。内容面の関連を考えて、年間指導計画に示された単元の順番を入れ替えたり、実施時期を考慮したりするなどの「単元構成の工夫」をはじめとする、「5つの工夫」に取り組み、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指しました。

工夫その① 「単元構成の工夫」

昭和小学校では、教育課程に「二期4ステージ制」を採用しています。前・後期をさらに2つずつに分けて、「がちりステージ（4・5月）」「わくわくステージ（6～9月）」「じっくりステージ（10～12月）」「しっかりステージ（1～3月）」と定め、それぞれに重点目標を置いて教育活動に取り組んでいます。

本実践は「わくわくステージ」を中心とした



取り組みです。「豊かな体験の中で学ぶ」ことをテーマとし、理科では「生き物大好き」という単元の中で、春になり、学校の周りには生き物の様子がどうなったかを観察・記録したり、ホウセンカやモンシロチョウを育てたりします。これらの活動を発展させて、総合的な学習の時間では、「生き物ハンター」を目指して、敷地の中にはいる生き物を探したり、見つけた生き物の名前や生態を図鑑やインターネットを使って

調べ、ワークシートにまとめたりする活動を行っています。そして、それらの学習を束ねる場として、国語科の「書くこと」の単元である「生き物のとくちょうをくらべて書こう」に取り組みます。子どもたちが目的意識をもって楽しく学べるように、言語活動「生き物カタログをつくらう」に収斂する単元デザインとしました。

工夫その②

「学習活動の工夫」

昭和小学校では、三年生以上の全ての学年で、総合的な学習の時間の年度末のまとめとして行っている学習があります。「1年間、総合な学習の時間で学んできたことを下の学年に伝えよう」というものです。これは当該学年においては振り返りと表現の学習として機能しますし、発表を聞く下学年においては、次年度の見通しをもつ機会になります。ですから、三年生の子どもたちは、二年生の時に一つ上の学年から「三年生で始まる『総合的な学習の時間』では、こういう勉強をするんだよ」という発表を聞いています。そのため「学校を生き物ランドにしよう」という単元と、そこで行われる学習活動の大体はイメージをもつことができます。

とは言え、あらかじめ決められた学習内容を順番にこなしていくだけでは、「主体的な学び」にはなりません。そこで、学習活動に自分たちで名前をつけ、独自の学習計画を立てることにしました。3学級の子どもたちが特別教室に集まって、昨年度末に聞いた（子どもたちの記憶に残っている）前年度の三年生の学習の様子を共有し、「みんなの学習に名前をつけるとしたら、何がいいかな？」と投げかけました。子どもたちの発言からキーワードを拾い、板書しました。最終的に「生き物ハンターになろう」ということで、学習活動の名前が決定されました。そして、「生き物ハンターになろう」の学習を意欲的に進めることができるように、学習活動の枠組みを設定しました。

「生き物ハンターになろう」の進め方

- ・学校の敷地の中から「生き物」を見つける。
- ・敷地の衛星写真（Googleマップからプリントアウト）に記録する。
- ・見つけた生き物の数によって「ハンター」としてのランクが上がる。
- （みならい↓かけだし↓アマチュア↓じゅくくれん↓プロ↓マエストロ）

これらはワークシートに記録していきます。ワークシートを綴ったファイルは、学習の見通しをもつとともに、「どのように学ぶか」という視点から設定したテーマ（生き物ハンターになろう）の進捗状況・達成度合いを振り返ることができるように、毎時間ごとに「ハンターレベルはどこまで上がったの？」と問い、学習の中のリフレクションが行われるような場面をつくりました。

工夫その③ 「環境設定の工夫」

子どもたちが主体性を発揮して学習に取り組むためには、魅力的な環境設定が欠かせません。前節で述べた「生き物ハンターになろう」のワークシートは、A1判のサイズに拡大したものを廊下に掲示して、自由に書き込んでよいことにしました。生き物のリストが長くなっていくことが活動への意欲付けとなった他、互いに友達が見つけた生き物を、自分も探そうとする姿としても現れていました。こうした「互いに触媒となる」関係性が生まれるように環境設定を工夫しています。

研修部提案授業の前に...

総合「生き物ハンター」
・学校の周りの生き物
・アリを探そう
・道南の野生生物



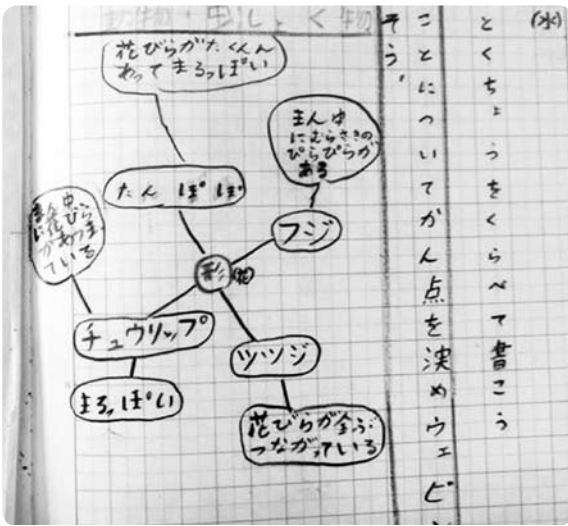
また、ゲストティーチャーとの出会いという環境設定も、学びの世界を広げ、学習の魅力を高めます。学校の中で一番見つけやすいのはアリだったのですが、その習性を調べても、図鑑による知識だけでは子どもたちの心は動きません。そこで、アリの生態の研究者である東典子さん（北海道大学・当時）に学校に来ていただき、学校で見かけるアリの食べ物などをクイズ

仕立てにした実験で教えてもらおうという時間をつくりました。「アリはビスケットの欠片とイカの切り身のうち、どちらに集まるか」という実験では、結果を見に行く子どもたちの表情には、熱中して学んでいる様子がうかがえました。さらに、東さんからの紹介で、ヒグマの保護を目的に研究を進めている道南野生生物室の近藤麻美さんを学校にお招きして、「道南の野生生物」というテーマで、ヒグマの生活や人との関わり、共生していくために注意していきたいことなどを教えていただきました。近藤さんはヒグマの毛皮や頭骨、ヒグマよけのグッズなど、ホンモノを持ち込んでくださったたり、説明をわかりやすくするための模型や動画などをたくさん見せてくださいました。

こうした先哲との対話からは、教室よりもはるかに広い世界を垣間見ることができます。自分の考えを広げたり深めたりするには、こうした場面が欠かせません。

工夫その④ 「思考ツール活用の工夫」

理科や総合的な学習の時間では、「豊かな体験」を保障しました。国語科では、それらの学



びを取締させるための「生き物のとくちょうきくらべて書こう」の単元に取り組みました。その際、子どもの「主体的・対話的な学び」を引き出すために、思考ツールを活用しました。

■ウエビングマップ

調べたいことについて、観点を定めて調べ学習の見通しをもつためにウエビングマップを取り入れました。通常、発想を広げるためには、何でもよいから自分の好きな生き物を中心に書き、その属性を周りに書いていくという、「対象→観点」という方法が採られることが多いの

ではないでしょうか。しかし、これではウエビング自体はたくさん書けるものの、調べる段階で方向性が定まらなくなりがちです。

そこで、「色」「形」「大きさ」といった「観点」を中心にして、そこから対象を広げ、その対象について調べるという「観点↓対象」という順に使い方を工夫しました。

■プロセス図

板書で、学習活動のまとめりに、おおまかに「やること」の順番を示しました。ノートにこれを視写し、「自分が得意だ、できそうだ」と思うものを黄緑で、「これは苦手だな、手伝ってほしいな」と思うものを黄色で塗るように指示しました。このプロセス図を子ども同士で見せ合うと、「自分の強みを生かして教えてあげる」ことも、「得意な友達に手伝ってもらおう」こともスムーズにできます。

■ベン図

子どもたちが作成したカルタを、友達同士で交流したところ、「もつと絵と説明が合うようにしなければならぬ」という課題があることがわかりました。とは言え、絵の精度を上げたほうがよい子もいれば、説明の文章を見直したほうがよい子、もつとたくさん情報を集めたほうがよい子など、課題は子どもごとに違いました。



そこで、修正のための1時間(校内研究の「研修部提案授業」として公開)のはじめに、自分たちが何を中心に取り組むのか、一人ひとりの「自分のめあて」を決めて取り組みました。それをネームプレートによって「見える化」するためにベン図を使いました。

一人ひとりの学習課題は異なりますので、このようにして子どもたちの計画を把握するとともに、支援のためにどのように教師が関わつ

ていくのかを考えるための手がかりとしました。また、似たような「生き物」を調べている子どもたちによるグループの他にも、学習課題によるグループも組みました。

こうして「見える化」の手法を用いながら、より学びやすくなるように環境を整えて、子どもたち同士の協働を促しました。

工夫その⑤ 「評価の工夫」

前述のように、個々の子どもたちがそれぞれの学習課題を自分で設定し、「主体的な学び」を充実させようとすればするほど、マンパワーが不足します。一斉授業のように、教師の授業技術によるコントロール下に子どもたちを置くことは難しくなります。

そこで、ルーブリックを作成して、一人ひとりの学習状況を把握するとともに、個別の学習課題を設定し、教師の関わり方の方針を立てておくことにしました。

子どもたちはそれぞれの課題解決のために、図鑑で調べ直したり、インターネットから情報を取り出したり、絵を描き直したりしています。ルーブリックがあることによって、教師から必

本時の前に：個別の学習課題を設定

【資料／提案授業】「書くこと」の評価基準に照らした実態と個別の学習課題

書くこと	各段階にある児童
A 素晴らしい！ ○生き物の特徴を明確にし、図との整合性がとれているとともに、自分の調べた範囲で「特徴」のレベルが揃っている。	<ul style="list-style-type: none"> ●○○△…文章と絵が整合している。「比較」の図が秀逸。全てのメモでつくることを目指させる。 ●△△◇…文章と絵が整合している。他の生き物との比較が優れている。 ●□□○…文章と絵の整合が取れていて、文体が読み手の興味を引き付ける工夫がされている。 ●○○●●…文章と絵が整合していて、絵に工夫がみられる。
B 合格 ○生き物の特徴を明確にし、目的や必要に応じて理由や根拠をあげて書いている。	<ul style="list-style-type: none"> ●▲▲□□ ●◇◇○○ ●▽▽○○ ●●●● <p>文章と絵が整合している。絵を工夫させたい。</p>
C あと一歩！ ○理由や根拠の結びつき、図との整合性は不十分であるが、伝えようとしている内容は書いたり絵に表したりすることができている。	<ul style="list-style-type: none"> ●△△○○…解説の絵をどうするか判断して表現する。 ●◇◇○○…文章と絵の整合性を高める。 ●○○●●…引用はできているので、絵をどうするか考える。 ●□□◇◇…絵の整合性を高める。 ●○○○○…文章と絵の整合性まであと一歩。文章はよい。 ●○○●●…文章は良い。絵をどうするかが課題。 ●▲▲○○…文章は良いが、絵を工夫する必要あり。 ●△△●●…あと一歩！ 絵の整合性を高める。

要と思われる働きかけを積極的に行うことができました。27名のクラスですが、ルーブリックで学習の状況がC段階・D段階の子どもを中心に、17名の子どもと具体的に相談をすることが可能だったと手応えを感じています。こうすることで「指導と評価の一体化」を実現し、限界（マンパワーの不足）はあるものの、子どもの状況

に応じた適切な指導ができたのではないかと考えています。また、ルーブリックの作成は、研修部の4人で相談しながら行いました。点数化できない評価の客観性を保つためには、複数の教員による「モデレーション」の必要性が指摘されています。つまり、ルーブリックを導入することによ



って、自然と教職員の協働を図ることができる仕組みになっています。

実践を終えて

以上の実践は、昭和小学校における「論理力の育成」という研究主題の解明のために、校内研究として取り組みました。

事後検討会で行われた協議では、「5つの工夫」によって学習の効果を高められたという成果が確認されました。

そして、それとともに残された課題は、やはり「Bに到達しない（支援の必要な）子どもの学習をどのように充実させていくか」というミクロの視点から、この実践を受けて「次年度以降の教育課程の改善をどのように図っていくか」というマクロの視点まで、いくつかが指摘されました。

授業改善は果てしない取り組みです。具体的な指導法を考えることとともに、教育課程を修正していく必要に迫られることもあります。残された課題の解決のため、今後も「5つの工夫」の精度を上げることを窓口として、よりよい実践を目指していきたいと考えています。

〈参考文献〉

- ・ウイギンズ／マクタイ著 西岡加名恵訳『理解をもたらしカリキュラム設計』（日本標準）
- ・佐伯胖監修／渡部信一編『学び』の認知科学事典』（大修館書店）
- ・関西大学初等部著『関大初等部式思考力育成

受賞の言葉

北海道函館市立万年橋小学校教諭

藤原友和



この度は栄誉ある賞をいただきありがとうございます。ありがとうございました。

本稿における実践は、前任校である函館市立昭和小学校での校内研究で、「研修部提案授業」として公開した授業を基にしています。平成26年度からの3年間、研究主題「触れ合い、高め合い、進んで試みる子の育成」論理力を育成する 国語科学習指導案を通して」に迫ろうと、理論構築と授業づくりを通じた仮説検証に取り組んできました。

ちょうどその頃、指導要領改訂のための

法研究』（さくら社）

- ・犬塚美輪／樺本弥生著『論理的読み書きの理論と実践』（北大路書房）
- ・西岡加名恵／石井英真／田中耕治編『新しい教育評価入門』（有斐閣コンバクト）
- ・平成28年度函館市立昭和小学校研究紀要

諮問がなされ、「アフティブ・ラーニング」や「カリキュラム・マネジメント」という聞き慣れない、しかし時代を席卷するキーワードが現れたのでした。研修部員一同、そして職員一同がどのようにしてこの大変革を乗り切ろうかと知恵を出し合い、子どもたちに力をつけるにはどうしたらよいかと手探りの研究を続けました。

また、学校外からも、交流のあったまちづくり活動の仲間の力を借りて、ホンモノに触れる機会を多く設定しようとしてきました。前例のない取り組みを理解し、背中を押してくれた管理職の存在も大きいものであったと思います。

この3年間の取り組みは、課題も多が残すところですが、ごなたかのお役に立てれば嬉しく思います。